

平成 22 年度 静岡大学地域連携協働センター
公開シンポジウム



地域と大学を結ぶ

～教育・研究・地域連携の融合をめざして～

報告書



2011.3

静岡大学
地域連携協働センター

平成 22 年度 静岡大学地域連携協働センター 公開シンポジウム

地域と大学を結ぶ

～教育・研究・地域連携の融合をめざして～

静岡大学では、大学と地域との連携・協働をより円滑に進め活性化するため、平成 20 年に地域連携協働センターを設立し、様々な活動を行ってきた。その中で確認されたことは、学生の地域連携・貢献活動に対する地域からの期待・関心がきわめて高いことであった。実際の取り組みにおいても、学生が大学と地域をつなぐ結び手、効果的な媒介者となっていることが少なくない。

昨年度はそれを受け、「地域と大学をつなぐ～メディエーターとしての学生」と題した公開シンポジウムを企画し、大学ー地域連携におけるメディエーターとしての学生の役割に注目しつつ、学内外 7 つの連携事例を紹介し、地域連携のあり方について考える機会とした。シンポジウムでは、興味深い取り組みが報告されたが、ほかにも多くの取り組みが進行中であり、特に浜松キャンパスで展開されている事例を取り上げきれなかったこと、市民の参加のみならず地域連携を今後担うべき学生の参加が少なかったことなどが反省点としてあげられた。

今回のシンポジウムは以上の点を受け、引き続き地域と大学が連携・協働するためのメディエーターとしての学生の役割に注目しながら、地域連携・協働の実践がそのまま教育・研究の活性化にもつながっているような取り組みを主に紹介し、地域が大学にこれまで以上に期待をし、また地域連携・協働へより多くの学生・教職員が向かう機会とする。

■日時

2011 年 1 月 26 日（水）17：45 ～ 20：00

■会場

静岡大学 浜松キャンパス総合研究棟 24

静岡キャンパス共通教育 A301（TV 接続）

■主催

静岡大学地域連携協働センター

■パネリスト（登壇順）

戸田三津夫（静岡大学工学部准教授）

鈴木 孝志（静岡大学工学部 4 年）

高橋 邦武（地域住民代表・浜松市富塚地区自治会連合会長）

岡田 安功（静岡大学情報学部教授・地域連携推進室長）

葛田 浩輔（静岡大学情報学部 4 年）

犬塚 千晃（静岡大学情報学部 4 年）

加藤 勇樹（静岡大学情報学部 4 年）

雨宮 奈美（静岡大学情報学部 4 年）

土屋 英二（地域住民代表・浜松商工会議所）

平野 雅彦（静岡大学人文学部客員教授）

秋枝 伶子（静岡大学人文学部 3 年）

新名 隆大（地域住民代表・テレビ静岡制作部）

小二田誠二（静岡大学人文学部教授）

吉野 亜湖（静岡大学非常勤講師）

吉本 邦弘（地域住民代表・足久保ティーワークス）

■コーディネーター・司会進行

満井 義政（静岡大学地域連携協働センター特任教授）

CONTENTS

04 主催者挨拶

静岡大学地域連携協働センター センター長 柳澤 正

05 事例報告 1

アメニティ佐鳴湖プロジェクトについて

戸田三津夫（静岡大学工学部准教授）

鈴木 孝志（静岡大学工学部 4 年）

高橋 邦武（地域住民代表・浜松市富塚地区自治会連合会長）

12 事例報告 2

情報学部地域連携推進室の活動

岡田 安功（静岡大学情報学部教授・地域連携推進室長）

葛田 浩輔（静岡大学情報学部 4 年）

犬塚 千晃（静岡大学情報学部 4 年）

加藤 勇樹（静岡大学情報学部 4 年）

雨宮 奈美（静岡大学情報学部 4 年）

土屋 英二（地域住民代表・浜松商工会議所）

19 事例報告 3

プロジェクト型授業における地域連携・協働

平野 雅彦（静岡大学人文学部客員教授）

秋枝 伶子（静岡大学人文学部 3 年）

新名 隆大（地域住民代表・テレビ静岡制作部）

小二田誠二（静岡大学人文学部教授）

吉野 亜湖（静岡大学非常勤講師）

吉本 邦弘（地域住民代表・足久保ティーワークス）

26 パネル・ディスカッション

パネリスト（発言順）

岡田 安功、高橋 邦武、鈴木 孝志、秋枝 伶子、新名 隆大、

戸田三津夫、犬塚 千晃、雨宮 奈美、吉野 亜湖、吉本 邦弘

コーディネーター（司会進行）

満井 義政

公開シンポジウム開会挨拶

静岡大学地域連携協働センター長 柳澤 正

みなさんこんばんは。静岡大学の社会産学連携担当理事の柳澤でございます。浜松からの映像では、人が映っているところは見えませんが、静岡のA301教室は学生さんで溢れかえるほどの人数であります。これだけ大勢の方が参加されていて、しかも見渡しますと市民の皆様もいらっしゃるということで、主催者としては誠にありがたいことです。

このシンポジウムは昨年度に静岡大学の創立60周年を記念して始まり、今年度は2回目ということになります。

最近の大学の活動の中で、教育研究のみならず、社会連携に関わる活動も、非常に重要なものと位置付けられています。静岡大学でもいろいろな学生さん、教職員、さらに市民の方々が、一緒になって様々な活動に取り組んでいらっしゃいます。しかしそれらの活動内容について、市民の皆さんもですが学生さんもあまりご存知ないということで、その内容を少しでも知っていただき、地域連携、社会連携ということは何かということを考えていただきたいとの思いで本日のシンポジウムを企画いたしました。

今日は合計4件の事例報告がございます。それが終わりますと、質問事項を中心としたパネルディスカッションで議論を深めていただく予定であります。

特に今回の事例報告では、学生さんのみならず、地域の方々にもお話をいただくということで、私自身も今まであまりそういった機会がございませんでしたので、話が聞けるということを非常に楽しみにしております。

2時間15分と短い時間ですが、学内のいろいろな活動について知っていただき、それならば自分も様々な地域連携の活動に少しでも参加してみようという気持ちが皆さんの中に生まれてくれば、非常にありがたいと思っております。

前置きが長くなると正味の時間がなくなりますので、これくらいでご挨拶とさせていただきます。是非、ご清聴とその後の活動をよろしく願いたいと思います。それでは、早速最初の報告をお願いいたします。



開会の挨拶をする柳澤・静岡大学地域連携協働センター長

事例報告 1

アメニティ佐鳴湖プロジェクトについて

戸田三津夫（静岡大学工学部准教授）

佐鳴湖とその水質の現状

工学部物質工学科の戸田と申します。浜松の方には、佐鳴湖関係の資料とパンフレットを配布してありますのでご用意ください。静岡の方はご希望がありましたら、事務局に言ってください。

（資料1）まず第1ページですが、我々が対象としている佐鳴湖は、汚れていることで有名ではありますが、冬の穏やかな夜には夜景が非常に美しく、きれいな姿をしています。浜松の方は佐鳴湖をよくご存知だと思いますが、静岡の方はあまりご存知でない方も多いと思います。グーグルの航空写真を用意しました（資料2）。赤い矢印で指しているところが佐鳴湖です。静岡県で2番目に大きい湖ですが、それでも小さいですね。長さが2kmくらいで幅が600mくらい、深さが2mくらいと、とても浅い湖です。この辺りは市街化が進んでいまして、急激に汚濁が進んでいます。2001年度から2006年度はワーストワン。その後3位、4位と続きまして、昨年は10位あたりに改善しました。流域の下水道の整備率は90%から80%くらいあるのですが、これだけたくさんの方が住んでいるとなると、やはり汚濁というのは解消しません。

（資料3）地図を見ますと、30m等高線が示されていますが、佐鳴湖は台地の中に囲まれた構造にあります。水源は山の方につながっておらず、台地からの湧水が主な水源となっています。

プロジェクトの目的と内容

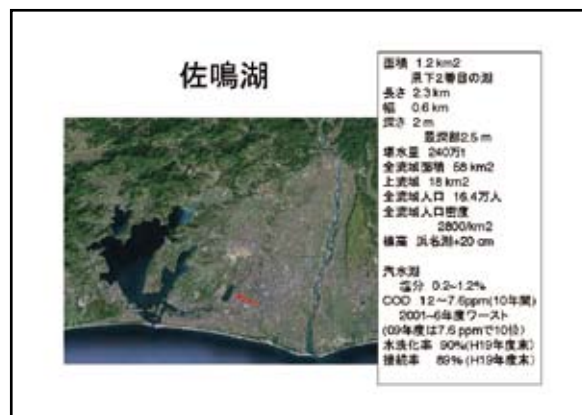
（資料4）2003年の10月に我々はプロジェクトを設立しまして、汚濁の改善と浄化を目的として活動してまいりました。なぜこういうことをやり始めたかは、この地域における大きな懸案事項であったということです。そこで工学部が何かで



事例報告を行う戸田・静岡大学工学部准教授



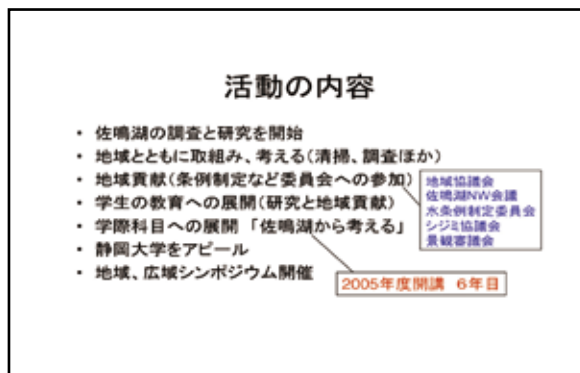
資料1



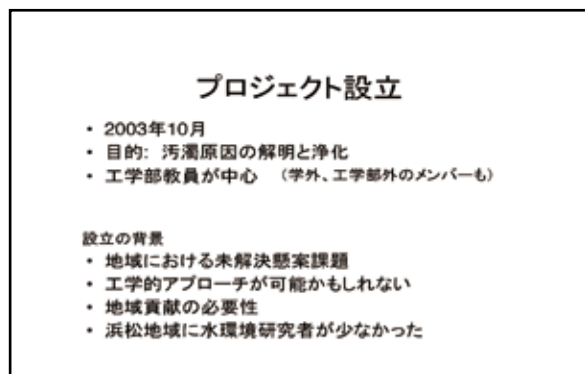
資料2



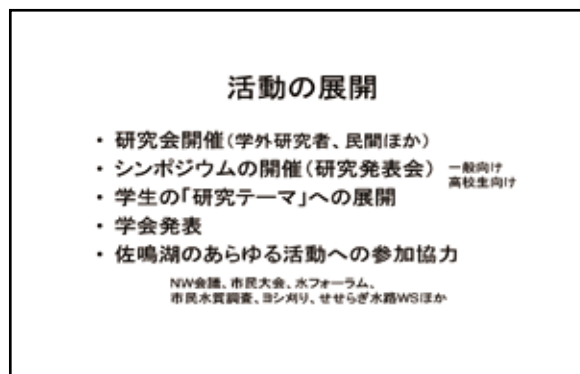
資料 3



資料 5



資料 4



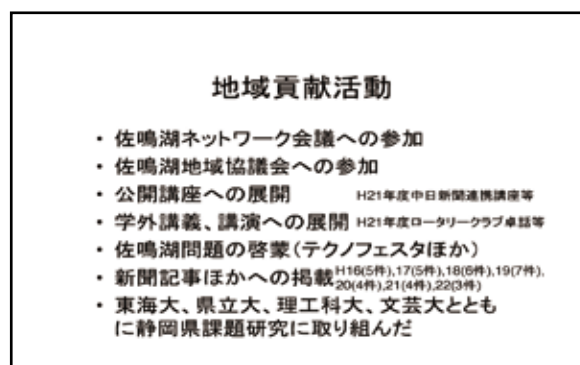
資料 6

きるのではないかと、地域貢献ができる可能性があるのではないかと。あとは浜松地域に水環境研究者がほとんどいなかった。環境保全の研究者があまりいなかったということで、われわれ工学部がここで貢献する余地があるのではないかと。ということです。

(資料 5) やってきたことは、調査と研究はもちろんですが、地域とともに考えるという、まさに本日のこのシンポジウムのタイトルどおりのことをやってきました。また、このような条例の制定委員会や地域協議会など、いろいろな行政とのタイアップができる会議に参加してまいりました。また、学生の教育への展開。学際科目の「佐鳴湖から考える」は今年 6 年目に入っていて、佐鳴湖というひとつの目標に対して集中的に 15 回講義することを続けています。そして、静岡大学をアピールする。それから、地域や広域のシンポジウムを開催して成果を発表してきました。

(資料 6) 活動の展開ですが、いろいろな研究会を行ったり、シンポジウムを開催したり、あるいは研究成果を学会に発表したり、いろいろな地域の活動に参加したりしています。

(資料 7) 地域貢献活動についてはここにあげ



資料 7

てありますが、「ネットワーク会議」という組織の中でいろいろな活動をしています。地域における活動に関しては、なるべく参加するようにしています。

(資料 8) 研究費については、幸い工学部からずいぶん援助をしていただきまして、工学部長裁量経費というのを毎年いただいて、研究を続けています。特にこの中で、静岡県の戦略課題研究をやらせていただきまして、電話帳のような厚い報告書があります。ご関心のある方は、本学の中央図書館と浜松分館には配置してありますので是非ご覧ください。

今後の活動

（資料9・10・11）最後に、地域連携の活動としていろいろありますが、直近は2月5日に次回があります。これは、市民による新指標水質調査で、本日もおいでいただいている浜松市土木事務所の主催です。年に1回やっているもので、我々のプロジェクトとしても積極的に参加しています。資料は夏のものですが（資料10）、佐鳴湖に出かけて、いろいろな指標の水質調査をします。年に1回くらいは、こちらに入野漁協の組合長さんがいらっしゃいますが、うなぎのかば焼きをお皿に山盛りにして、佐鳴湖の味覚を味わうというのも、運が良ければ体験できます（資料11）。

この水質調査に関しては、2月5日が次回ですので、ご関心のある方は後ろにもパンフレットがございます。参加希望がございましたら、是非持っていただきたいと思います。

次は、我々の研究室の鈴木の方から、最近の活動調査について提示します。



資料 10



資料 11

研究費

- ・ 工学部長裁量経費 2003~2009
- ・ 特別教育研究経費「連携融合事業」(文部科学省)
- ・ 静岡県戦略課題研究2006~2007
- ・ 静岡県戦略課題研究フォローアップ2008
- ・ 浜松市委託研究
- ・ 科学研究費補助金
- ・ (財)浜松科学技術研究振興会山田基金

資料 8



戸田准教授の報告に耳を傾ける来場者（浜松キャンパス）



資料 9

最近のプロジェクト活動

鈴木孝志（静岡大学工学部 4 年）

実地調査の概要

静岡大学工学部物質工学科 4 年生の鈴木孝志と申します。

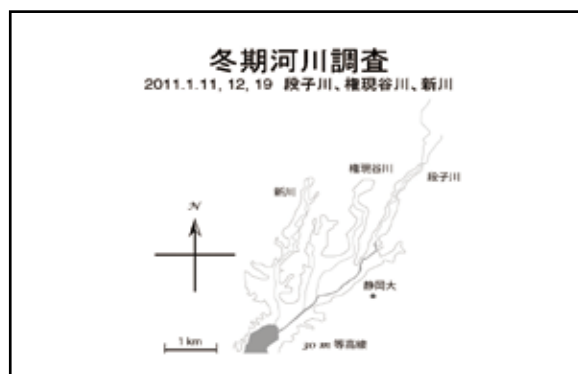
（資料 13）佐鳴湖流域には、新川、権現谷川、段子川という 3 つの河川があります。この河川は佐鳴湖に流れ込んでいるので、佐鳴湖に影響を与えるということで、1 月 11 日と 12 日、19 日に、実際に現地の川に赴いて、調査を行ってきました。これら 3 つの河川に関しては、普段から特定の 1 カ所の場所で水を取って、安定同位体を測定しています。これは特殊な値で、水の起源や、どこからきた水なのかとか、雨の影響などを調べてきました。今回は、実際に川全体の様子であるとか、そういったものを詳しく調べるために現地に行き、長靴や胴長などを履いて実際に川の中に入って調査してきました。

段子川の調査

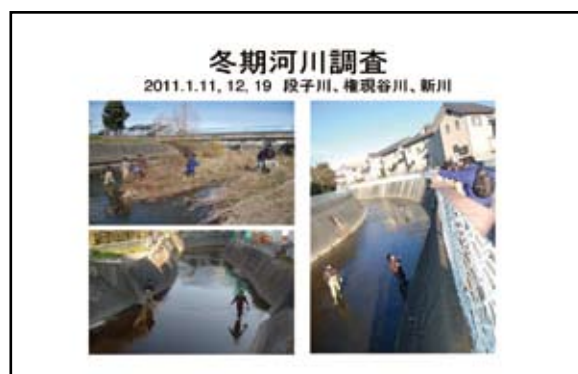
（資料 14・15）初日に行ったのが段子川です。段子川は主に住宅街を流れている川で、浜松の方は分かると思いますが、ツタヤとか富塚の主婦の店の辺りから流れています。資料 14 の写真のように、下流から上流に向かって、どんどん川の中を歩いていきました。川の水は主に湧き出ている水、湧水がメインなので、その湧水地点を調べました。湧水は冬だと、普通の川の水より温度が高いため、温度計を水につけて高い温度が示されたところが湧水地点だと分かります。その湧水地点というのがいくつかありましたが、この段子川においては、ある程度密集



事例報告を行う静岡大学工学部 4 年の鈴木さん



資料 13



資料 14



資料 15

している湧水地ポイントがいっぱいあるところと、全くないところもあるというような感じで見つけました。最初はこのような（資料 14）少し草が生い茂ったところでしたが、ある程度上って行って主婦の店を越えた辺りから、三面張りのコンクリートで補整された感じに、段子川は変わっていきます。水深もこの時点では膝下くらいまでありましたが、もうここでは足首以下の水深しかなく、比較的歩きやすかったです。

（資料 15）この地点では、この壁とか、ここにパイプがありますが、ここから湧水や排水が出ているので、そういった水をサンプリングに採って、後で安定同位体を測ってみるようになりました。上流まで

上っていくに従って、ゴミがすごく多くて、住宅街ということもあって、汚い水が出ていたり、いろいろと残念な光景も見られました。しかし、川の中を歩いてきたのは珍しいことで、小学生などから注目されて面白かったです。非常に残念だったのは、この調査を終えた瞬間に、橋を自転車で通っていったおじいさんがビールの空き缶をポイと投げ捨てていったので、投げ返してやろうかと思ったほどです。先ほどの湧水の値がこちら（資料 16 下）、普段の川の水がこちら（資料 16 上）です。



資料 16

新川の調査

（資料 17）2 日目には新川に行きました。ここには、佐鳴湖付近にお茶屋橋という橋があり、その辺りから入って、上流まで一緒に上って行きました。段子川とは違って、自然が多いとてもきれいな場所でした。最初はこんな感じ（資料 17 右下）だったのですが、最後はこう（資料 17 左上）本当に山の中の川という感じで、最終的には竹藪や古い木が道をふさいでしまって、木や竹藪に突き当たりながら進みました。転びもしましたし大変でしたが、浜松にこんなところがあるのだと知り、いい経験になりました。この川も同じように湧水ですが、川の底から湧いているというより、こういった川の横の壁から出ている水が非常に多かったです。多分湧水だと思うのですが、これもまたサンプリングして、後で安定同位体を測ってみようと思います。

権現谷川の調査

最後に行った 3 つ目の川が権現谷川です。この川は蛍が見られるということで知られています。この権現谷川には、上流から下流へ下って行きました。川の魚のカワムツやオイカワなどもたくさん見られて、新川よりは自然豊かというイメージはなかった

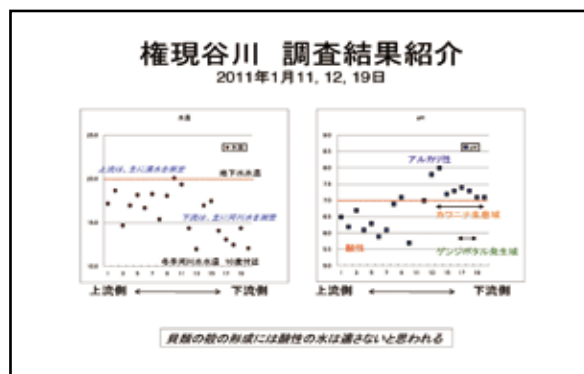
のですが、ほのぼのとした感じでいい川でした。これも川の底から湧き出ているというよりも、こういった壁から流れ出ている水が非常に多くて、それをまたサンプリングし、後で安定同位体を測ってみるつもりです。



資料 17

pH 測定

（資料 18）水が酸性かアルカリ性という値の pH を測定していったのですが、この川は蛍が見られるということで、蛍の餌になるカワニナという貝が生息している場所があります。ただ、権現谷川全体に生息しているのではなく、2 か所のポイントがあります。ポイント数になりますが、15 と 17 というところでサンプリングをしました。その辺りにカワニナが生息していて、pH の値を見るとアルカリ性だということがわかります。最初の上流のほうだと水が酸性です。ですからやはり酸性の水では貝殻を形成することは難しいということで、カワニナはアルカリ性の水のところに生息しているようでした。6 月頃には、やはりカワニナが生息している付近でゲンジボタルが確認されているということなので、興味のある方は 1 回見に行ってください。以上です。



資料 18

プロジェクトと地域の取り組み

高橋邦武（地域住民代表・
浜松市富塚地区自治会連合会長）

浜松市富塚地区の現状

それでは引き続きまして、富塚地区自治会連合会長を務めさせていただきます高橋から、つたない報告をさせていただきます。

富塚地区は今地図に出ましたが、六単位自治会で構成されていまして、この大学の西側にあります。今言いました段子川、新川、御前谷排水路、段子川の支流の権現谷川と中途川が縦断または横断しているような位置にあります。

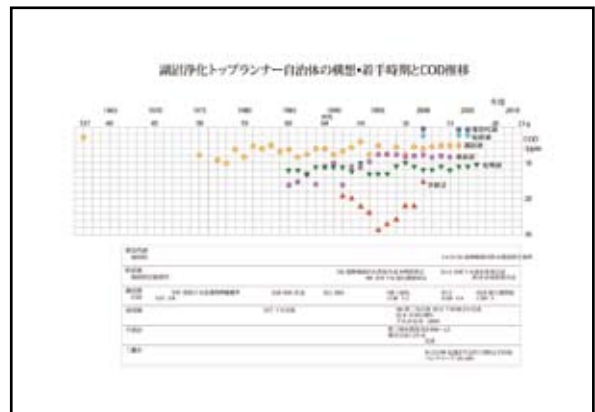
私どもは「自治会の役割」とか、「まちづくり」とか、「まちづくりの中の環境」、「環境のなかの佐鳴湖浄化」という流れで、取り組んでいるわけです。特に「アメニティプロジェクト」の中で説明させていただきますと、富塚地区は昭和三十年代の後半から、非常に宅地化が進みまして、その結果住居などから出る生活排水、それからもちろん工場も発達しましたので工場からの排水が、先ほど言いました河川から佐鳴湖を汚した。汚したと言いますか、暮らしの受け皿になってきたというパターンになっています。

対策としての下水道整備は、なかなか進みませんでした。当局の方に大変失礼な言い方になるかもしれませんが、先進地に比べると、少し遅れたように思っております。それぞれの先進地の理由がありますので、それは後ほど説明させていただきます。いずれにしても、段子川、新川の一流域である佐

鳴湖が、生活排水や下水の受け皿になって支えになってきてくれたパターンと認識しております。

アメニティプロジェクトを遂行されている静大さんとの接点と言いますか、出合いは、先ほど戸田先生のご報告がありましたが、「工学的に捉えたい」という参加されるときキーワードが、私にヒットしたからです。これは、私どもが「佐鳴湖浄化地域協議会」に参加する中で得てきたいろいろな知識に基づきます。今まで取り組んできた方には失礼な言い方になるかもしれませんが、工学部として何か違う感じがしたわけです。私どもは先輩から教わりながら、近年先進地の調査をしていましたが、それともヒットしたわけです。

（資料 19）皆様方のお手元に「トップランナー比較」というグラフがあると思います。諏訪湖や猪苗代湖などが入っていますが、それぞれの取り組み方が、私にとってきわめて工学的な汚染源対策です。この汚れを元からとるという考え方が、私どもの心にヒットしたのではないかと考えています。



資料 19

そのグラフで見えていただきますと、猪苗代湖と諏訪湖が書いてあります。猪苗代湖は水質日本一を維持するために、徹底的に汚水源対策、下水道対策と農業の水質改革をしました。また、諏訪湖は流域100%下水道化を40年くらい前から公表して実施して、平成7年くらいに100%になって、最近ではCOD3を目指していますが、いずれにしても汚染源対策を徹底していることが参考になりました。

その汚染源対策のもうひとつに、雨水浸透ますという事業があります。これはいろいろ先進地もありまして、そのグラフの一番下のほうに小金井と三鷹市の事例を挙げてあります。日本ではトップクラス



事例報告を行う住民代表の高橋さん

で、10万世帯くらいで5万戸くらいまでいっているところですが、地下水が井の頭公園に浸透して、透明度が上がったとか、野川の水が復活したとかそういった良い結果が出ています。浜松市も取り組み始めていますが、まだまだです。静大の瀬野先生が、地下水については大変熱心に活動くださっていますので、是非その成果を上げていただければ、ありがたいなと思っております。

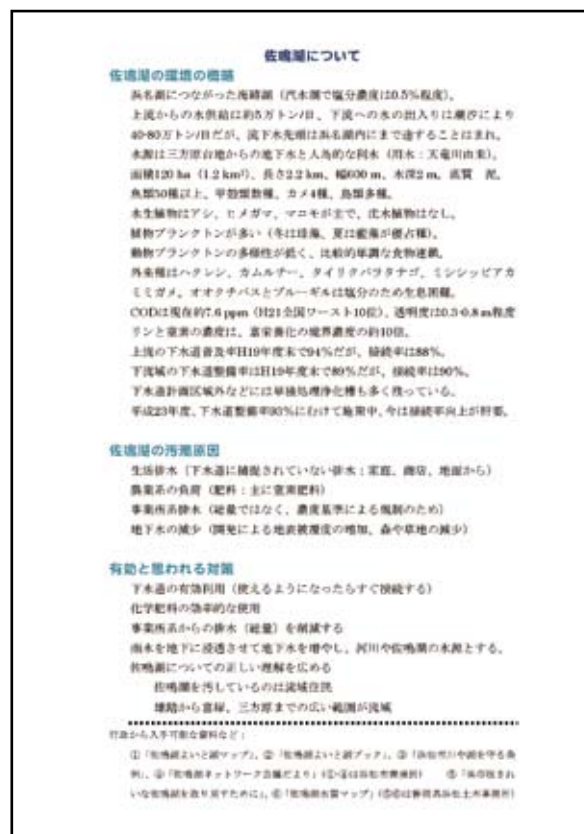
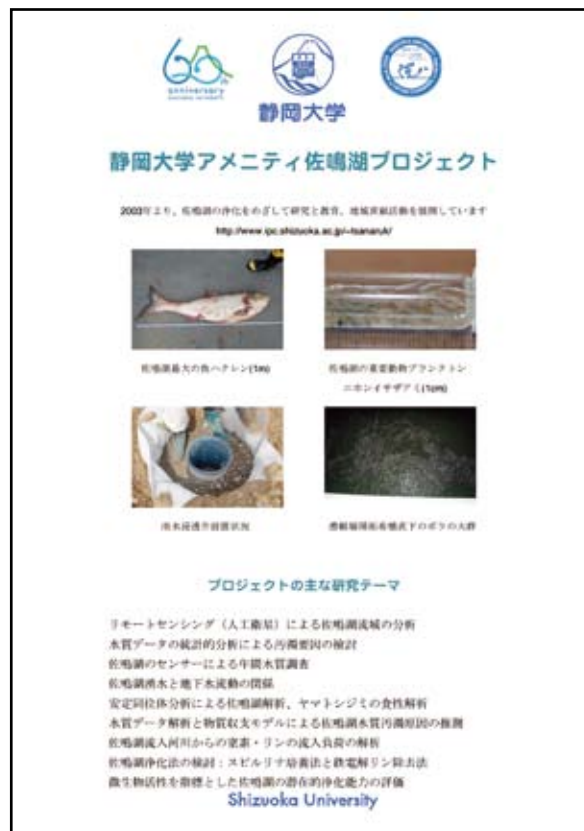
本日発表の機会を取らせていただいて、非常に感謝しております。先ほどの学生の方にも、寒い中、権現谷川に入り込んでの新たな発見や驚きを提供していただきました。私どもはこの数年蛸を観察しておりますが、楽しむ人、観察している人にも新たな励みになると思っていますので、今後とも是非よろしくお願ひしたいと思っています。

また、工学部以外の方も含めた静大の方々には、佐鳴湖について以外にも、フェスタとか浜松市政の講座を受けていただくとか、いろいろなご協力をしていただいている接点がございます。これからも浜松市当地区の魅力ある、持続性のある地区となりますように是非ご協力をいただければありがたいと思っています。以上でございます。



高橋さんの事例報告に聞き入る来場者（浜松キャンパス）

添付資料：静岡大学が作成したアメニティ佐鳴湖プロジェクトのパンフレット



事例報告 2

情報学部地域連携推進室の活動

岡田安功（静岡大学情報学部教授・地域連携推進室長）

地域連携推進室の位置づけ

（資料 1）私の紹介の中に、地域連携推進室長とあります。情報学部は地域連携をするための組織をもっています。それを地域連携推進室といいます。したがって、全学の方でセンターがありますが、センターの一部局というわけではありません。これは学部として、地域連携をやりたいという方針で、諸々のことをやるというものです。

私は 2 年目の室長ですが、今心掛けているのは、特別なことはやらない。つまり、研究や教育がごく自然に地域連携をするような環境づくりをする。それが地域連携活動を続けるうえで一番大事じゃないか。そのための仕掛けづくり、あるいはパートナー。こういうことを思ってやってきました。

地域連携活動の内容と実績

（資料 2）「情報学部の地域連携活動」に書いてあるうち、準備中のものは現在進行中で、そのほか上にあるものはこれまでやってきた実績です。もちろんこれら準備中以外のものもやろうかと模索はしている最中です。この中で、中小企業のホームページ制作支援活動については、この後、学生 4 人と商工



事例報告を行う岡田・静岡大学情報学部教授

会所の土屋課長から報告してもらいます。具体的な事例報告としては、このホームページ作成の事例を今日を中心に据えたいと思います。以下、簡単にご紹介したいと思います。

（資料 3）「活動成果」これは活動成果として、学生がこんなことを、アンケートに書いてくれているよということです。

情報学部 地域連携推進室

- ・ 情報学部と地域社会の窓口業務
- ・ 地域への社会貢献
- ・ 現室長の方針
特別なことはしない
学部の研究と教育が自然に地域へ社会貢献できる環境を作る
仕掛け作り、触媒作用

資料 1

情報学部の地域連携活動

- ・ IT教育支援ボランティア活動
- ・ IT講師補佐ボランティア活動
- ・ 公開講座
- ・ 中小企業のHP制作支援活動
- ・ 浜松国際ピアノコンクール・ボランティア活動
- ・ 浜松まちなかにぎわい協議会との連携
- ・ 附属島田中学校との学内連携（準備中）
- ・ まちづくりプランナーの養成（準備中）
- ・ 教員の社会貢献の広報（準備中）

資料 2

活動成果

- ・ 自己発見
- ・ 精神的充実
- ・ 満足感
- ・ 将来の進路をしっかりと考える

資料 3

(資料4) まず、「IT教育支援ボランティア活動」。
これは室として毎年やっているもので、小学校ないし中学校に学生が行って、コンピュータの使い方を教えたりしています。今年は前後期とも17名ですが、これは室ができる以前、実際ははっきり覚えていないぐらいですが、おそらく9年前からやっていることです。本日は写真の用意はないですが、地域連携推進室のホームページをご覧くださいと、活動中の写真が載っていますので、是非ご覧ください。

(資料5) 「IT講師補佐ボランティア活動」は、浜松市教育委員会の中に、天竜川・浜名湖地区総合教育センターというのがありますが、そこへ行って学生が先生たちにパソコンの使い方を教えるというものです。ここでは幼稚園、小学校、中学校の教員が研修を受けます。その際、学生たちが講師の補佐をして、実際に手とり足とり、学校の先生たちにパソコンを教えています。紹介している人数はここに書いてあるとおりですが、これは先生たちが何人希望するかによって変わります。ですから、やりたいと言ったけれどもできなかった学生もいます。この活動にも先ほどの活動にも、認定証を連名で出しています。

(資料6) それから「公開講座」。これはテクノフェスタの日に一般市民の方たちに受講していただく。今年は500円取っていますが、広報活動ならば無料化できるということなので、来年度からは無料でやれるように申請しています。

(資料7) 「公開講座の内容(2010年)」については、情報学部が3プログラム制をとっていて、ID、IS、CSという3つプログラムがありますから、そのプログラムに沿った形で開いております。

(資料8) 「中小企業のHP制作支援活動」は今日この後で本格的に報告しますが、商工会議所と協定を結び、その協定の実施としてやっています。静岡文化芸術大学が持っている芸術的な能力と情報学部が持っている技術的な能力、こういう能力を生かし合いながら、単なるシミュレーションではなくて、社会的な需要に基づくホームページ作りをする。こういう点で、学校内でやりながら、実社会を経験するという非常に貴重な教育をやっているという評価を受けています。これも地域連携推進室としての認定証を出していますが、浜松商工会議所会頭名での認定証も出ます。

(資料9) 「浜松国際ピアノコンクール・ボランティ

IT教育支援ボランティア活動	
前期実績	17名
後期実績	17名
認定証の授与 全員が協会の事務局に自己負担している。	
2010年度実績(前期)	
受入校	学生数
北小	3 (B2*3)
通分小	2 (B2,B3)
広沢小	4 (B2*3)
変馬小	3 (B2*3)
緑塚中	5 (B2*4,B3*1)
2010年度実績(後期)	
受入校	学生数
北小	3 (B1, B2*2)
通分小	2 (B3*2)
広沢小	3 (B2,B3*2)
変馬小	3 (B1*3)
緑塚中	5 (B2*4,B3*1)
高台中	1 (B1)

資料4

IT講師補佐ボランティア活動	
・天竜川浜名湖地区総合教育センター ・幼稚園、小学校、中学校の教員研修 ・学生が現職の教員に教える! ・Word, Excel, Power Point ・毎年、前期の活動 ・2010年の参加者: 2年生 3名、3年生 6名 4年生 2名、M1年生 1名 待機 3名	
認定証の授与	

資料5

公開講座	
・テクノフェスタの第1日 保護者懇談会の日に開催 ・一般の市民に公開 ; 無料にしたい!!! ・情報学部の研究と教育を紹介 ・地域住民の情報学部への理解を高める ・保護者に情報学部の研究と教育を知らせる ・3プログラム制に沿って講演内容を決定 ・情報学部の教員が講演	

資料6

公開講座の内容(2010年)	
・南利明 「情報の機能について～操作と管理～」 ・水野忠則 「インターネット、モバイル、クラウド、そしてデジタル社会へ」 ・湯浦克彦 「市民ネットワークシステムの展開 ～公共機関、企業、そして大学との コミュニケーションの未来～」	

資料7

中小企業のHP制作支援活動	
・浜松商工会議所と協定 ・静岡文化芸術大学と混成チームで活動 ・二つの大学の特色を生かし合う ・技術と芸術 ・現実の社会的需要と向き合いながら学ぶ ・認定証の授与	

資料8

ア活動」。このピアノコンクールは昨年もありましたが、3年に1回のこと、学生が取材、編集、配信等をやっております。これも認定証を連名で出しています。

（資料10）そして今年度から始まったのが、この「浜松まちなかにぎわい協議会」との連携です。すでに授業に来て、まちなかについて話をしてもらっていますし、ここからいろいろな講習、講演会等の連絡があります。室とは別に、学生がこのこのブログを作って運営をしています。そういう意味で、ここの提携というのは、室では知らない活動を学生がやって、実際にまちなかの活性化に寄与しているということです。そして静大は特別会員です。したがって、情報学部地域連携推進室はこの特別会員として、窓口業務をやっています。ですから、ここから来る情報は工学部の学生にも知らせるということをやっています。

（資料11）「附属島田中学校との学内連携」。現在これが進行中です。

（資料12）「まちづくりプランナーの養成」。これは情報社会学科のカリキュラムを生かす試みです。こういう科目を生かして、まちづくりの能力を持った学生を育てていく。これはカリキュラムを通じた地域連携です。

室長として思うこと

（資料13）最後のところ「室長として思うこと」ですが、時々困るのがこの3番目です。ホームページを作ると言ったら、学生を安い労働力のように言ってくる人がいます。が、我々はそうでなく、あくまでも教育の一環として学生を育てている。その中で学生たちには社会経験になり同時に地域貢献になる、そういった感覚をもって運営しております。

次に学生の報告です。

浜松国際ピアノコンクール ボランティア活動

- ・ 3年に1回、開かれる
- ・ 2009年11月8日～23日
- ・ 主催：浜松市
浜松市文化振興財団
- ・ 取材、編集、配信
- ・ 認定証の授与

資料9

浜松まちなかにぎわい協議会と連携

- ・ 静大は特別会員
- ・ 浜松市中心市街地の活性化に協力
- ・ 企画に学生ボランティアが参加
- ・ 協議会が授業に協力
- ・ 情報学部地域連携推進室が静大の窓口
情報学部だけでなく工学部の学生にも情報提供

資料10

附属島田中学校との学内連携

- ・ 附属島田中学校のHPを情報学部生が制作
- ・ 準備中

資料11

まちづくりプランナーの養成

- ・ 情報社会学科のカリキュラム
- ・ コミュニティ系のガバナンス教育
- ・ 所定科目の履修＋インターンシップ

資料12

室長として思うこと

- ・ 社会貢献(地域貢献)は大学の社会的使命
- ・ 地域貢献は研究と教育を活性化させる手段
- ・ 学生ボランティアを安い労働力だと勘違いして期待されて困るときがある
- ・ 学生が生き生きする環境を作ることが大切
- ・ 大学間の学生ネットワークが大学の知らない所で地域貢献をしている
- ・ 地域連携推進室は地域貢献の狂言回し

資料13

ホームページの制作活動 1

葛田浩輔（静岡大学情報学部 4 年）

桑原貴金属 1

中小企業のホームページ制作活動の報告をさせていただきます。我々のグループは、3つありますが、まず私が桑原貴金属様と共同で作りましたホームページについて報告させていただきます。私は静岡大学情報学部 4 年の葛田浩輔と申します。よろしくお願いします。



事例報告を行う静岡大学情報学部の学生。
左から葛田さん、犬塚さん、加藤さん、雨宮さん

（資料 14・15）桑原貴金属様は老舗企業で、親しみのある、浜松の人に愛されているジュエリー屋さんです。この写真に映っている方が店主さんで、この方で三代目になるそうです。ジュエリーのデザインから加工、修理、リフォームまでされるお店です。

これが作ったホームページのトップページです。温かみのあるホームページにしたいということから、こういう配色にし、デザインから加工までやっているのが、このページを見れば分かるようにしました。ブライダルのページもありまして、ここも綺麗な写真を選んで飾りました。

この活動を通して学んだことは、「職人から学んだ『つくる』ということ」です。この桑原さんもジュエリーのデザインをされて作るという作業をされている。一方僕たちもホームページを作る作業をしている。その中で共通していることは、桑原さんはお客様の欲しいデザインをお客様から聞いて引き

出し、自分が持っている技術で、さらにお客様が満足のいくものを仕上げて提供する。僕たちも同じで、桑原さんのお店の良いところを桑原さんから聞いて、僕たちが持っている技術を組み合わせることで、そこからさらに桑原さんに喜んでいただけるものを提供していきたいというところです。「つくる」ということは、相手と向き合って、相手の気持ちを汲み取って、そこからものづくりをしていく。ここがとても共通しているなということを学んだ活動だと思いました。こういった活動ができたのも、桑原さんや岡田室長をはじめとする地域連携推進室の方々、浜松の商工会議所の方々といろいろな方の支えがあってできたことで、非常に満足し充実した活動であったと思っています。



資料 14



資料 15

ホームページの制作活動 2

犬塚千晃（静岡大学情報学部 4 年）

桑原貴金属 2

私も桑原金属様のホームページ作りに携わりました、情報学部情報科学科 4 年の犬塚と申します。私がこの活動を通して学んだことは、「現場で学んだグループワーク」です。今回この事業のお話をいただいたときに、私は楽しみの反面とても不安に感じておりました。実際に企業の方のウェブを作成するというので、お店のホームページとして公開されることに、社会的責任ということも、とても感じていたためです。しかし、このプロジェクトを終えた今、参加できて心から良かったと思っています。

プロジェクト終了までのあらゆる過程において、想定していなかった問題が次々と起こりました。クライアントや外部で一緒にウェブを作ったメンバーとのやりとりは、想像をしていたよりとても困難なものでした。ウェブ制作途中には、解決していかなければならない問題も数々起こりました。現場で学ばなければ、こういった問題に対して、自分たちで自ら考えて、解決策を出そうと動くことはしなかっただろうと思っています。現場で学べたことによって、そういう価値のあるグループワークを学べたことを、とてもありがたく思っています。



ホームページの制作活動について語る葛田さん（左）と犬塚さん

ホームページの制作活動 3

加藤勇樹（静岡大学情報学部 4 年）

林糴製造所

（資料 16・17）別事例のご紹介です。僕は林糴製造所というところで取り組みました。これは先の発表の前の年の事例です。そこは味噌や甘酒を作っているお店です。とても雰囲気の良いお店で、それを意識してホームページを作りました。その辺の説明は省略します。

僕が活動を通して印象に残ったことは、「浜松の良さを発見！」することができたということです。お味噌や甘酒もおいしいし、お店のご主人の林さんがとてもいい人で、連携しやすかったというのがあります。今でも甘酒を買って飲んだりしています。

この事業を通して、浜松を知るということができ、それで浜松をより好きになったのかなと思います。こういうことはこの地域連携の事業がなかったら、知ることがなかったところなので、とても満足しています。



資料 16



資料 17

ホームページの制作活動 4

雨宮奈美（静岡大学情報学部 4 年）

丸喜屋商店

最後に丸喜屋商店様を担当させていただいた情報学部情報社会学科 4 年の雨宮奈美から報告させていただきます。

まず、丸喜屋商店について簡単に説明しますと、浜松駅近くの肴町通りに位置するお店で、鰹節や海苔などの乾物類と浜名湖産ウナギなどの海産物を主に取り扱っています。店主さんとその奥さんの夫婦 2 人で経営している、歴史ある乾物屋さんでした。

（資料 18）次に、実際に作ったページを少しお見せします。まずこれがトップページです。老舗、和風、古風といったイメージを出すために、このようなデザインにしました。商品の写真を大きく 3 枚載せていますが、この写真の上にマウスを乗せるとその商品を使った料理の写真に切り替わるという工夫をしました。たとえば、海苔の写真の上にマウスオーバーすると、その海苔を使ったおむすびの写真に切り替わるといったようになっています。

（資料 19）これはお料理メモというページで、商品を使った出汁のとり方とか、お料理のレシピを載せるページも作りました。

（資料 20）最後にこの経験から学んだことですが、まず「自分でできることの線引き」をきちんとしなければならぬということです。できる仕事のすべてを、責任を持って終えたということと、クライアントの方にきちんと伝えるということと、責任の所在をはっきりさせなくてはならないということを経験しました。また、「人と人とのつながりの重要性」を改めて感じ、クライアントとの信頼関係やグループメンバー内での人間関係があってこそ、意見が活発に交わり、いいコンテンツができるということを実感しました。

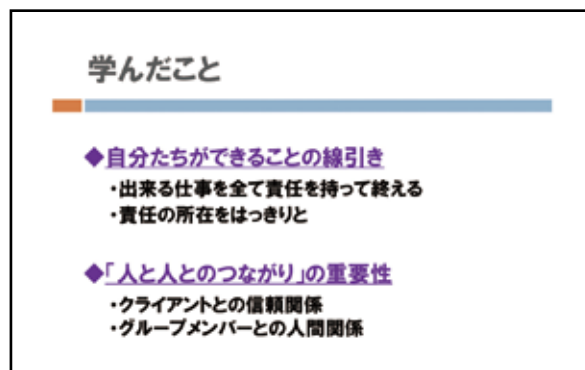
学生からの報告は以上となります。ありがとうございました。



資料 18



資料 19



資料 20



ホームページの作成について語る雨宮さん。右は加藤さん

産学連携事業としての HP づくり

土屋英二（地域住民代表・
浜松商工会議所）

事業概要と目的

浜松商工会議所の土屋と申します。私の方からは、学生さんからもお話しいただいた中小企業のホームページ作成支援事業についての概略をご説明させていただきます。

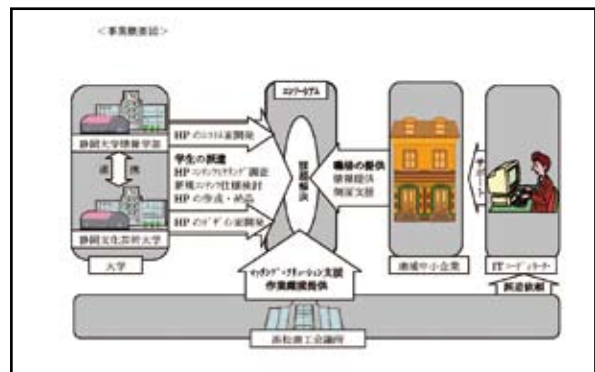
（資料 21）この事業につきましては、産学連携事業ということで、平成 20 年から経済産業省関東経済産業局の委託事業の一環として実施をしております。今、こちらに連携の具体的なものが出ておりますが、今年度も広域関東地域イノベーションパートナーシップ事業ということで実施し、3 年目を迎えております。この事業については地域経済の活性化と教育の充実を図ることを目的としまして、静岡大学、静岡文化芸術大学、それから IT コーディネータと商工会議所が連携をして、ホームページを持っていない事業所や持っているけれどもまだ活用していない事業所を対象として、学生が直接企業を訪問し、ヒアリングしながらホームページを作るという事業でございます。

当初の目的としましては、学生さんにおいては、地域の中小企業の経営者さんから事業経営を生で感じられる良いきっかけになるのではないかと、中小企業においては、ホームページの制作の過程において、経営者自身が自社の強みの気づきの場となること、それから IT を身近なものに感じていただけるきっかけになればということを期待しまして、この事業を進めているわけです。商工会議所としましては、学生さんと企業の上に IT コーディネータの方を入れて、専門的な立場でアドバイス等全面的なサポートをして実施している事業でございます。

これまでも、学生さんからご報告がありました食品製造業や加工業、そういったところの 5 か所の事例がございます。今年は呉服店さんと浜松土産品協会の 2 か所を対象に実施している状況でございます。



事例報告を行う地域住民代表の土屋さん



資料 21

事業所の反応

先ほどは学生さんの感想等がありましたが、実際に支援を受けた側の事業所の感想をご報告させていただきます。

まず林檎製作所さんからは、「制作段階での学生の感想や話を聞く中で、消費者の見方を改めて認識することができた。ホームページが多くの方の目に触れるということを含め、今後消費者にお届けする商品に対して責任感をより強く持たなくてはいけないと感じることができ、職人として一層身が引き締まった」という感想でございます。乾物の丸喜屋商店さんからは「一般的によくあるホームページよりは、一歩進んだものを制作してもらった」。桑原貴金属さんからは「最終的な結果には非常に満足している。私の当初から考えていたコンセプト通りのものができたと思っている。このホームページを見て一人でも多くのお客様が来てくれればありがたい」というような感想をいただいています。支援事業所さんからも大変感謝をされていることで、当初、計画・期待をしていたような形になったのではないかと思います。

事例報告 3 - 1

プロジェクト型授業における地域連携・協働 1

平野雅彦（静岡大学人文学部客員教授）

情報意匠論という授業の中で

人文学部言語文化学科、「情報意匠論」という授業を担当しています。2004年に「市民と静大共同企画講座を進める会」が市民の間で発足し、その団体の寄付によって立ち上がった授業です。同時に「静岡の文化」という授業も始まりました。

情報意匠論では、たとえば、静大創立60周年のシンポジウムに参加したり、言語文化学科新一年生のための「履修の手引」を作成したり、静大附属図書館の活性化計画を考えるなど大学が抱える課題に取り組んでいます。またもう一つの柱は企業や組織と組み、現場でおきているリアルな課題を解いていくという試みに挑戦しています。例を挙げると、地元のスーパーマーケットの方たちと一緒に制作した新聞広告があります。2006年に静岡新聞広告賞のグランプリをいただき、2008年に第28回日本新聞協会・新聞広告賞広告主部門優秀賞を受賞、合計7つの賞を受賞しました。新聞広告は通常、デザインを勉強する大学や専門学校が取り組む課題ですが、今回これらを作ったのは言語文化学科の学生、デザインを専門に学んでいる学生たちではありません。それでもこのようにモノを伝えることの大切さを考えることで、成果が出るのだという証になりました。

この授業のポイントは、外の世界とつながることのできたメソッド、方法といったものを、研究や講義という自分たちの学びの場で生かせないか考えるようにすること。社会を知り勉強になった、楽しかったという感想で終わらないところです。

その中で、テレビ静岡と静岡大学が協力し、静岡のシティプロモーションに関わる取り組みをした事例を紹介させていただきます。



事例報告を行う平野・静岡大学人文学部客員教授



平野客員教授（右）と静岡のシティプロモーションに関わった新名さん（中央）と秋枝さん（左）

テレビ静岡と静岡大学の協働

秋枝伶子（静岡大学人文学部・学生）

チーム「テレ静大」

今回、「情報意匠論」を通し、新名隆大さんをはじめとする「テレビ静岡」の方々と協働させていただきました。静岡大学学生とテレビ静岡、計5名のチームでの取り組みということで、名付けたチーム名は「テレ静大」。具体的な活動として、静大生の視点をもとに静岡にある関心事への疑問を見つけてリポートし、その様子を毎週土曜11時59分放送「パロパロ」の「探Q係」というコーナーで放映していただきました。

「テレ静大」には番組制作など経験のない言語文化学科の学生、中には留学生も2人います。何も分からない私たちに新名さんやスタッフの方たちが手取り足取り教えてくださいました。何よりも初めにスタジオを見学させていただき、そこで学び、最も感動したことはチームワークです。また、私たちが制作したVTRは1週間から2週間かけて得た膨大な情報を取捨選択し集約したもので、放送時間にして10分弱。周到的な準備を行い、それをどのようにしたら効果的に使えるか物事を多角的に見て判断し、凝縮させることを学びました。テレビを通し、自分が伝えたいことを「どうすれば伝わるか」と考えることや、伝えることの醍醐味を味わい、経験することもできました。

それでは早速、VTRをご覧ください。よろしくお願います。



事例報告を行う静岡大学人文学部の秋枝さん

チーム「テレ静大」制作による テレビ番組の概要

人文学部学生の秋枝さんをはじめとするグループがテレビ静岡と協働して制作したVTRは、2010年から東静岡に設置されている等身大のガンダムについての調査をまとめたもの。

内容は、ガンダムが東京から東静岡に移設される前、「ガンダムはどちら向きに立つのか」という疑問を中心に進められている。「新幹線側に向くのか」「国道1号線に向くのか」「富士山に向くのか」「また逆に背負うのか」という質問を100人に街頭取材した結果、「新幹線側向き」の予想が圧倒的に多く、「富士山向き」「富士山を背負う」という意見がそれに続いた。移設を進める静岡市やバンダイ静岡工場に問い合わせたが詳細は明かされず。そこで一昨年秋に両替町通りにオープンした「G-BAR」というガンダムをテーマにしたバーにも取材に赴き常連客に話を聞く。すると「太陽を背にした方が格好良い」という意見や「将来ガンダムのライバルであるザクも東静岡に来る」など、マニアらしい意見も聞かれた。

ソーシャルネットワーク mixi を通じて取材を依頼した「明鏡大佐」を名乗る千葉県の男性、西岡さんも出演している。西岡さんはお台場でガンダムが解体された後すぐに東静岡を次の設置場所として予想。実際に東静岡を7回訪れ飲食店や駐車場などの周辺施設をネット上で公開していた人物だ。

ガンダムの向きに関する西岡さんの予想は「富士山を背に、東静岡駅に向く」だった。理由は「東静岡駅で降車した人が富士山とともに、最初に目にできる」というもの。後日行なわれたバンダイ記者会見でその予想が見事的中したことが明らかになった。

VTRはテレビ静岡「パロパロ」の「探Q係」で一般に放映された。番組内では秋枝さんもインタビュアーとして出演している。

協働を通じて感じたこと

ご覧のとおり私たち「テレ静大」は、足を運んだ方も多くいらっしゃることでしょう、現在東静岡に設置されているガンダムについて探求いたしました。テレビ静岡の方たちと協働していく中で、静岡が好きだから盛り上げたい、静岡を豊かにしたい、そういった目的意識を感じていました。「ものづくりの静岡」ということで、ガンダムのある東静岡はその中心地。企業との活動を通し、静岡模型教材協同組合の方々やそれぞれに違う専門、得意分野を持ついろいろなメーカーも力を合わせ、静岡を盛り上げようという目的のため一丸となっていたのです。そういった場面を見てきたことで、私も静岡大学の学生として何か力になりたい、そんな思いを抱きました。

テレビ静岡の皆さまとの活動から3点ほど、これから生かせるのではないかというものがあります。1つはやはりチームワーク。ゼミやサークルでの活動など、チームワークが必要とされる場が大学には多いと思います。さらにその中で、目的意識をしっかり持つこと。「パロパロ」には、「いつもと変わらない週末を、番組を通じて少しでも豊かに」というコンセプトがあり、その目的のためにスタッフ各々がチームワークを発揮し、それぞれの責任を全うしています。チームとして1つの目的に向かい頑張っていくこと、これを大学の活動でも生かしていきたいと思っています。

2点目は、伝えることの難しさです。どうすればより伝わるのか、多角的視点を学んだにも関わらず未だ生かせていません。反省を踏まえ、伝えることの困難をこれから乗り越えていき、その方法を考えること。今から生かしていこうと思います。

3点目は、思いを強くもつこと。今回の活動で、「静岡を良くしていこう」という思いを強くもった人たちがどのように仕事をこなしているかを見てきました。私も、ある思いを強く持った人たちと出会うことで自分を磨いていき、頑張っていきたい。そう感じています。



協働のチーム名を発表する秋枝さんと新名さん



チーム名の「テレ静大」を発表する秋枝さんと新名さん



事例報告に耳を傾ける参加者（静岡キャンパス）

テレビ静岡と静岡大学の協働

新名隆大（地域住民代表・
テレビ静岡制作部）

協働による成果

秋枝さんのレポートに出てきた「明鏡大佐」という千葉県の男性がおりましたが、あのような方はなかなかスタッフで探しても見つからないものです。秋枝さんのチームが mixi を駆使して探しだし、お互い匿名で何度も交渉を続け、その結果来てくださることになりました。大変な成果だと思います。

「探Q係」というのは看板コーナーでした。毎回ネタを出すことに苦しんでいましたが、今回リクエストさせていただき、秋枝さんのチームからは数々に及ぶ案をいただきました。自分たちでビデオ撮影、編集したものもあります。それらが不採用となる中、とても良いネタを見つけてくださったと思っています。

今回の活動を通して、正直、静岡大学は人材とアイデアの宝庫だと感じました。人文学部言語文化学科という名前から、言語や文学を研究するところであり関わりはないように思えますが、普段の研究成果をもとにしてしっかり地域とつながっていけるのだということを感じています。「探Q係」はクエスチョンが面白く、アンサーに意外性があれば成立するコーナーなのですが、そこにシティープロモーションの要素を加えていただくことによって、ハイレベルな作品ができあがりました。スタッフの知恵の中では



事例報告を行う住民代表の新名さん

容易に到達できない高次元のものができあがったと思っています。

「テレビ静岡」は「人と地域を元気にするテレビ局」をスローガンに掲げていました。静岡大学の学生や先生方こそ、静岡に根を張り、地域の発展を願い日々研究に励んでいます。そのような思いのあるチームと協働することで、我々企業の側としても人と地域を元気にすることができ、私自身が会社から与えられ答を出せずにいた課題、「人と地域を元気にする番組に」ということへのひとつの答えに導くことができたように感じています。

今回は、平野雅彦先生が番組にレギュラー出演されていることをきっかけに、学生のチームと組むことができました。平野先生という媒体がなければ今回のようなマッチングもありませんでした。日々の中でマッチングの機会、お互いを知る機会、例えば静岡大学で研究されていることなどを企業が知る機会というものがあれば、これからの発展は無限大ではないか、そう感じました。

まとめ

平野雅彦（静岡大学客員教授）

きっかけ作りの重要性

プラモデルは静岡のシティープロモーションのひとつです。プラモデル業界の中でガンダムだけを取り上げてしまうことには多くの問題がありますが、業界だけではなくなかなか動きにくいというのも事実です。そのような生の現場へ飛び込んで現状を知り、学生の問題意識のカーソルが動いていくきっかけを作ることが大事だと思います。机上の空論ではダメなのです。外とつながって発見したことをもう一度学習の場へと戻す、情報意匠論では、さらにこの手法に改良を加え、事例を積み上げて行きたいと考えています。

事例報告 3 - 2

プロジェクト型授業における地域連携・協働 2

小二田誠二（静岡大学人文学部教授）

美味しい授業

「茶の世界」という授業についてお話しします。これは「学際科目」という、いろいろな学部の学生が受講している授業です。先の話にあった模型と同様、お茶は静岡にとって歴史的にも重要な産業。それに関する授業です。私の専門は江戸時代の文学ですが、国際的に活躍する茶人・吉野亜湖さんが10年ほど前に私の授業を受けており、私もお茶の周辺領域について調べはじめました。私のゼミでもお茶の勉強をしていた吉野さんが現在は非常勤講師となり、授業を受け持っています。静岡は抹茶ではなく煎茶の生産が盛んですが、若い人たちは急須でお茶を飲む機会が減っています。そういう若い学生たちにお茶を実際に味わいながら学んでもらうのがこの授業です。

全授業の約半分を吉野さんが担当し、ほかにゲストとして呼び出す講師がいます。県の部署であるお茶室※の方、農学部の方、森田先生、「足久保ティーワークス」という生産組合の吉本邦弘さん。吉野亜湖さんのパートナーの白雲さんという茶人。そして慶応年間から続く貿易商、ヘリヤ商会の谷本さん、マルヒデ岩崎製茶の岩崎さん、森町の長田製茶さんなど、生産から流通、科学とさまざまな分野の方をお呼びしています。毎回授業中にお茶を出すという「美味しい授業」でもあります。

その中で本日は吉野さんと「足久保ティーワークス」の吉本さんから、「茶の世界」に関してお話ししていただきます。

※お茶室：現在の茶業農産課



事例報告を行う小二田・静岡大学人文学部教授



「茶の世界」の事例報告に耳を傾ける参加者（静岡キャンパス）。パネリストは左から小二田教授、吉本さん、吉野さん

人文学部と産業の連携

吉野亜湖（静岡大学人文学部
非常勤講師）

文学賞で茶業を盛り立てる

大学院で勉強し卒業した年に「茶の世界」は始まりました。私は社会人学生だったので、大学で学ぶことを何か社会に対して伝えられるのではないかと、いう気持ちで来ていました。逆に講師としては、社会で得たものを学生に伝えられたら素敵だな、と思っていました。それが自然に実現したこと、また自分自身が「社会との融合」をテーマに掲げていたこともあり、今日皆さまのお話を聞き体験できたことを幸せに感じています。

近頃はお茶を葉で親しむ人が減り、茶業に元気がないので、学生の視点で何か提案することはないか、学生にレポートを出していただきました。すると一人の方が、『茶柱』という小説を書いてきてくださったのです。「茶を売るにはどうしたらよいか」をテーマにした小説で、ほろりと温かくなり、読み終わるとお茶が飲みたくなり、逆に大切な人にお茶をいれたいようなショートストーリーでした。「ああ、文学から茶を売ることもできるのか」という気付き、感動がありました。大学と茶業が連携するとなると、効能の研究調査や農学部による栽培などは他大学で例がありますが、人文学部の方が言語によって産業と関わるということにはなかったと思います。こういう方向性もあるのかと感動し、もともと小二田先生のアイデアですが、「茶柱文学賞」を設立するというのはどうだろう、ということで、県に相談に行きました。すると県も賛同してくださいました。静岡は文化で茶を伝えたり販売するということが不得手なので、「茶柱文学賞」という文学賞をたて、いろいろな大学の教員を審査員として学生の作品を募集したら面白いのではないかと、という方向で検討くださっています。来年、財団法人世界緑茶協会発行の「緑茶通信」で募集を開始する予定です。静岡県から文学賞が生まれ、茶業を盛り立てていくことは面白いな、と思っております。



事例報告を行う吉野・静岡大学非常勤講師

小二田誠二（静岡大学教授）

吉野さんの報告を受けて

衝撃の発表でした。実は今まで公表していなかった事実です。

本日、『茶柱』を書いた著者である学生は都合がつかずこの場に出席できないのですが、私もそれを読んで泣きました。教育学部の女子学生なのですが、文学的テクニックも織りまぜ、茶に親しむとはどういうことなのかとしっかりと語られていました。「これは本当に凄い」と思い、文学賞創設という運びとなったわけです。近いうちに公募が出ると思いますので、是非応募してください。

そういった具体的な動きもありますが、先日は葵区活性化事業のひとつとして、吉野さんと足久保めぐりをしました。農家から工場までを担う生産組合として活動する「足久保ティーワークス」の吉本さんとも座談会をしました。足久保の皆さん総出というくらい大勢の人が集まって、料理を振る舞ってくださったり、案内をしてくださったりしました。次に、授業での学生の反応などを、吉本さんから。

連携で生まれた勇気

吉本邦弘（地域住民代表・
足久保ティーワークス）

学生の反応に感動

静岡市葵区に足久保という場所があります。静岡のお茶といえば足久保から始まった、いわば発祥の地とされている場所です。760年ほど前にお茶が植えられ、そこから発展してきました。現在はペットボトルの流行などで地域の茶というのは衰退してきており、特に山のお茶というのは大変な時期になっています。

先日はそのような形で、生産現場について学生の前で発表させていただく機会をいただいております。そのとき手摘みの100g2,000円という一番良いお茶を振る舞ったのですが、ペットボトルに慣れている皆さんには分からないのかな、と思っていました。ところが学生の反響は大きく、一杯飲んだ後、目の色が変わっていくのが分かりました。その反応を見ただけで感動しました。それだけでなく案内の終了後、茶が欲しいということで100セットほどご購入いただいたのです。金銭面で余裕のないはずの学生が、お茶に興味を持ち、お金を出して買いそして飲む、広めてくださる。凄いことだと思います。「九州に押されている静岡のお茶は、もう駄目か」と思っていましたが、また勇気が湧いてきました。大変素晴らしい授業でした。

私たちは「とにかく良いものを作ればいい」と考えがちなのですが、学生から販売に関して、またラベルやその他のデザインに関してなど、いろいろな部分で面白いご意見をたくさんいただきました。勇気が湧き、これからまだまだやれる、という自信がつきました。とても良い経験をさせていただきました。ありがとうございました。



事例報告を行う地域住民代表の吉本さん

まとめ

小二田誠二（静岡大学教授）

総合大学の学際科目

現在は深蒸しのお茶に慣れてしまい、静岡の本山のお茶の味を知らない人が多い。本山のお茶が絶対に良いと言い切るわけではありません。しかし学生でも一般の方でも本当の味を知ったとき、「これがお茶なのか」と目の色が変わる瞬間を、私は何度も見えています。先ほど、授業のあとでお茶を買った学生がいたというお話がありました。例えばそういった学生が正月に実家に帰省したとき、授業で憶えたお茶のいれ方で、ご家族の前でお茶をいれたりする。そういう形で静岡の宣伝隊になってくれる、これが総合大学の学際科目の良いところだと思います。

学際科目ですから、いろいろな学部の学生がいます。その中で、自分たちの専門とお茶を結びつけたレポートを出してくれました。それは言語文化学科の授業ではできないことなのです。教員として学際科目は過酷で、私は3年で退きました。しかしこの「茶の世界」に関して、学生も茶業界の方も、皆が幸せになれる授業だったと思っています。

パネル・ディスカッション

パネリスト

岡田安功、高橋邦武、鈴木孝志、秋枝伶子、新名隆大、
戸田三津夫、犬塚千晃、雨宮奈美、吉野亜湖、吉本邦弘（登場順）

司会進行：満井義政（静岡大学地域連携協働センター特任教授）

● 満井

地域連携は、企業や行政、地域と大学・学生、この3者がどう織りなすかが重要です。今回の事例発表では、長期間に亘ってその3者が連携して成果をあげています。本当に感動しました。

お茶の事例報告では、学生が興味のあることに関心を持ち、ふと気がつくと教える立場になっていた、という話がありました。これは地域の方々が長年培ってきた情報、知恵、技術が学生・大学に伝わっていく、ひとつの循環機能ができた証のように思いました。

地域連携で大事なことは3者の関係に加え、長く継続できることです。何故このように続けられてきたのか、あるいは「もっとこうすればさらに発展していくのではないか」という考えが、それぞれの立場であることでしょうか。私は今回この部分にフォーカスし、皆さまに伺っていききたいと思います。現在同じように地域連携を推進されている先生方や学生、地域の方にとっても、参考になると思います。

まず、岡田先生に伺います。岡田先生は「もっとこうしたら」というお話があればお願いします。

● 岡田

「ごく自然に」というのは、「無理がない」ということです。無理があると、継続にはつながりません。何故このように連携できているか、それはやはり、核になる先生の存在が大きいと思います。地域連携は授業、特にゼミを核としてできあがっていくのです。大学は授業、研究を通じて社会と関わっていく場所ですので、地域と連携できるような先生がまずいます。その人が学生とともに社会の人間と結びつ



司会進行の満井さん

いていく。具体的には、商工会議所の土屋英二さんのような方です。核となる先生方に、地域と連携できるようなきっかけを与える。これが「自然に」行っていくことだと考えています。

● 満井

高橋さんに伺います。高橋さんは自治会連合会長を務めていらっしゃる、以前からいろいろなヴィジョンを持って環境に関する調査をされておりました。その中で静岡大学工学部との出会いがあり、工学的な捉え方を調査に結びつけていきたい、という話がありました。地域が大学と結びつくきっかけや、継続を可能にしている秘訣などを教えてください。

● 高橋

私は元々設計をやっておりました。ある製品を開発するときに調査必要ページが 300 ページなら 400 ページを調べ、実態を同じく 500 カ所、与えられた期間内にできるだけ徹底的に調べる癖がついています。退職前から環境に携わってきて、退職後に佐鳴湖の問題を改めて感じたとき、「いったい、何故汚れているのか、汚染源を断つには」ということに興味を抱きました。それが心を奮い立たせている、と思っています。

過去の経験を踏まえて調査を進めますと、「おやっ」ということが結構あります。その中で大学の方々が、自分たちの専門である“工学”の視点から環境保全に取り組むと宣言され、風が地域に向くのではないかと感じました。やはりそこには岡田先生のお話にもありましたとおり、核となる人を増やさないといけない、そう実感しています。

● 満井

推進する力がないと、なかなか前に進まない、ということでしょうか。

学生には在学期間があります。4 年間すべてを費やすわけにもいかず、1～2 年でそのプロジェクトから去ることになると思います。

学生の鈴木さんたちはこれまでの中で、「これがあったからできた、継続できた」というものはあるでしょうか。



パネルディスカッションの様子（浜松キャンパス）

● 鈴木

私は 4 年生になって戸田研究室に所属してから佐鳴湖に関わるようになりました。あと 1 カ月から 2 カ月で佐鳴湖の研究を終えてしまうことになります。

単純に、小さい頃から生き物や自然が好きでした。戸田先生の研究室でそういった関係に取り組んでいたのも、川の調査なども楽しくできたと思います。

私も近くに住んでいながら、佐鳴湖に行ったのは初めてでした。汚い汚いと言われていても行ってみると意外と良い場所です。実際に汚いのは水であり、湖の周りは散歩やランニングのコースになっていて、午後のひとときを過ごす場所としても良い場所だと思います。もっと佐鳴湖に来てもらう機会を増やしていけたら、興味を抱いてもらい、情報も増えていくのでは、と思っています。

● 満井

静岡の方にも伺います。秋枝さん。プロのタレントかと思うほどの出来栄でした。限られた時間の中でこれだけの成果をあげた、その原動力は何だったのでしょうか。

● 秋枝

前出の方のお言葉をお借りすると、「自然に楽しく」続けられました。初めて現場を見学させていただいた時に感じた、チームでひとつの目標に向かって達成しようと頑張ること。これが楽しくて、続けられた理由だと思います。

● 満井

新名さんにも伺います。取材を受ける側であればともかく、学生が企画から参加する条件で、単発のイベントとして終わらせないためにはどうするか。また、視聴率などビジネスとしての成功がないといけない中で学生をテレビ番組の企画で登用していく場合に、どのような要素が必要でしょうか。

● 新名

今回の企画は、大変良い視聴率を稼ぎました。静岡の人たちにとってとても関心のある、ガンダムという素材を取り上げたこともあります。構成についてはこちらが持てるすべての経験をつぎ込み、相手が学生ということで甘くせず妥協しないように、取材にも直接足を運んでもらい、明鏡大佐との交渉も必ず成功させてほしいと厳しい要求をしました。そこをクリアすれば放送できます、と。中途半端な企画があがってきた場合には、視聴率がそのまま利益につながるという私企業である以上、放送できない。

そう平野先生にもお断りしてありました。取材してみたものの、最終的に面白いものにならなければ廃案にさせていただくことも了解をいただいて、結果的には放送につながりました。

今後も私たちプロデュースする側としては、継続的に行っていきたいと思っています。私たち放送局は面白いネタ、企画を、放送作家の方たちに対価を支払い提供していただいています。今回、学生さんたちはギャラをお渡ししたいくらい一生懸命に活動してくれました。しかし平野先生に「ギャラはいらない」と釘を刺され、スタジオの出演が終わった後、チームのみんなにお弁当を差し上げた程度でした。学生さんも平野先生も私たちも、それぞれが持てるものを少しずつ出すことで、大きな費用をかけずともそのようにモノを作り出すことができます。企業として長引く不況に脱出口を見いだせない中で、たくさんのコストをかけての商品開発、設備投資はできません。満井さんがこの会をつなげること。岡田先生がおっしゃった、地域との連携を先生がコーディネートすること。そして小二田先生がおっしゃっていた、皆が幸せになる図式の中で新しいものを生むこと。このように、お金をかけず皆がハッピーになるものを生む構造があれば、今後にもつなげていけると感じています。



パネルディスカッションで発言する新名さん

● 満井

同じケースとして戸田先生に伺います。戸田先生の佐鳴湖プロジェクトは2003年からと長い期間に至っています。話を伺っていると、佐鳴湖から始まり、それからほかの地域との会合やイベントなどと多方面に関わり合い、それがまた佐鳴湖につながってくるように感じました。タイトな時間の中で、い

ろいろな地域の催しに参加されている、このことが継続の力になっているように思いましたが。

● 戸田

佐鳴湖は、非常にかわいいできの悪い息子のようなものです。愛しているのだけれどちょっと問題点があり、何とかしてやりたいという、愛すべき存在です。そういった地域住民の熱意の一方で、やはり無関心な方もいます。地域全体で解決していかないとどうにもならない問題ですので、関心を盛り上げるため、我々が現状を研究するだけでなく多少の働きかけをしていかなければ、ということ動いています。

● 満井

岡田先生、戸田先生や小二田先生、平野先生には何かあれば駆けつけるというフットワークの良さを感じました。

情報学部の大塚さんはホームページ制作で、大学を離れ会社で責任ある立場でモノを作り、クライアントに受け取っていただく経験をしましたね。その喜びや厳しさが、上手くできた原動力になったと感じましたが、いかがでしたか。

● 大塚

ホームページ制作にあたり現場の方と話し合いを進めていく中で、クライアントの一生懸命な姿、人柄の良さを感じ、制作側として私たちも役に立ちたい、このお店の良さを伝えたいという気持ちになりました。それが制作の原動力になったと思っています。

● 満井

隣の雨宮さんにも伺います。「責任」という言葉を盛んに使っていましたね。仕事の現場で自分に課せられた責任を果たすという意識は、仕事を完成させるという意欲につながるものでしたか。

● 雨宮

自分たちでできる範囲を線引きし、その責任を終えることを学んだ、ということ先ほど申し上げました。具体的に申し上げると、最初はお店の注文フォーマットを作ろうと考えていました。通販のようなページを作ること考え、私たちの技術でそれ

は可能だと思っていました。しかし、注文フォーマットの管理をその後どのようにしていくのか、という先々のことまでは私たちの中で考えられておらず、ITコーディネーターの方に「制作後のことまで考えて責任を負わなければならない」ということを教わりました。現場でしか学べない、貴重な体験でした。



パネルディスカッションの様子（静岡キャンパス）。
左から吉野さん、吉本さん、秋枝さん、新名さん

● 満井

吉野さんの「茶柱文学」の話は、自身が今までやってきたことを素直に表現することで「産」と「学」は違った結びつきができるという、一つの事例だと思いました。

連携する過程で、こうしたらもっとよくなる、こんなものがあれば素敵なジョイントができる、というようなことがあれば教えてください。

● 吉野

何故私が学生のときも非常勤講師としてもこうしてやれたかという、例えば私の担当は小二田先生でしたが、先生が学生のやることに対して凄く感動してくださるのです。先ほどの「茶柱文学」の話でもありましたが、学生の文書を読んで泣いてしまうのです。それは学生にとって嬉しいことです。私は平野先生の授業も受けたことがあります、平野先生も同じく、学生の出したアイデアに感動してくださいました。すると学生は「もうちょっとやってみよう、もうちょっとやってみよう」という気持ちが続きます。「社会に対して何か貢献したい」という欲求は潜在的にあるのです。

大学院で、お茶の本を翻訳する授業がありました。「これはとても良い本だから、きちんと翻訳してくだ

さい」と言われ、先生の監修というサポートもあり、最終的には出版にまで至ったものもありました。私たちの学んだこと、研究成果などが社会に役立つのだということを教えていただいた気がします。指導者に恵まれたこと、大学からそういう機会を与えられたことを知りました。出版に至ってはお金もかかるので、大学の助成金を先生が申請してくださるといふサポートもあったのです。

学生と産業界がふれあう機会というのも、あまりありませんでした。北海道や沖縄などから来ている学生も、「茶の世界」を受講していなければ静岡のお茶がどんなものなのか分からないまま、大学と自分の世界だけで帰っていったかもしれません。授業によって、地元の産業と結びつくきっかけを与えられたことに、私自身もとても感謝しています。確かに、私は自分が凄く楽しいからやっています。その楽しさを、自分だけのものとせず、もっと皆さんと共有できたらいいな、と思っています。



テレビ接続で静岡の会場にも語りかける満井さん

● 満井

足久保ティーワークスの吉本さんに伺います。吉野さんの話を受けて、地域として、受け皿になる側としてどのような感想をお持ちになられたでしょうか。

● 吉本

地域として仕事をしていると、その中で孤立してしまいます。こだわりがあっても、それは内輪でのこだわりであってなかなか外へ出ていくものではなく、挫折など問題点が多々あります。外から見ていただいたり、若い人から新しい意見をいただいたりいろいろな反応をしていただくことで、自分たちの

産業がどのように認められているのかがはっきりと分かってきます。そうすることによって「まだまだいけるんだな」という自信にもつながりました。

静大生は全国から静岡という土地を選び、静岡大学に來ています。そこで「静岡はお茶だ」というふうに結びついたことに感動を覚えました。各々が地元へ戻る、または上京するなどによって静岡のお茶がより全国に、世界に広まるのではないかと期待しております。

● 満井

長い時間お付き合いいただきありがとうございます。この地域連携が静岡大学にとって、そしてすべての大学にとって重要なことだと認識いただき、参加してみたい、積極的に関わりたいという学生や先生、地域の方が一人でも増えてほしいと、地域連携協働センターのスタッフとして期待しています。以上で終了とさせていただきます。ありがとうございました。



パネルディスカッションに聞き入る来場者（浜松キャンパス）

静岡大学地域連携協働センター公開シンポジウム 報告書

地域と大学を結ぶ
～教育・研究・地域連携の融合をめざして～

発行日— 2011 年 3 月 31 日

編 集—静岡大学地域連携協働センター

〒 422-8529 静岡市駿河区大谷 836

☎ 054-238-4902 FAX 054-238-4312

発 行—静岡大学地域連携協働センター